歴史地震
第34号(2019) 256頁

［講演要旨］

三重県における南海トラフ沿いの歴史地震津波に関する現地調査結果について

久永哲也*(1)・内田篤貴(1)・原田怜(2)・佐々木哲朗(2)・岩瀬聡(2)・浦谷裕明(3)・武村雅之(3)・都築充雄(3)
(1) 日本物理探鑛株式会社 (2) 中部電力株式会社 (3)名古屋大学減災連携研究センター

§1. はじめに

南海トラフでは，内閣府により最大クラスの津波の想定がなされている．本調査では，三重県において内閣府の想定最大波高を上回る，あるいはそれに類する波高を示す史料等について，その信頼性や現地状況の調査を踏まえ，検討を行った．

§2. 三重県内の特筆すべき津波高を示す地点

調査対象地点は，①鳥羽市国崎町，②伊勢市大湊町，③熊野市新鹿町，④北牟婁郡紀北町長島の4地点とした．これらの地点において，現地状況調査および史料の検討を行った．

①鳥羽市国崎町（内閣府の想定最大波高 27m）において，安政東海地震津波の際，23m の津波高を示す「津浪流失塔」（国崎町常福寺）がある．その概要は，「安政元年十一月四日五ツ時に大地震があり，大津浪が五ツ後から四ツ時に襲来し，その高さは彦間において七丈五尺（約23m）に達し，家が四軒流失した．さらに，鎧崎にあったという旧海士潜女神社と剣崎神社を流失し，城山・坂森山を打ち越して，船や網を流失した．浜手の田畑数ヶ所が荒廃し，六人の流死者が出た」とある．また，同市松尾町所蔵の「大福帳」では，「前の浜」では「盆じほ（大潮）之程ニ御座候」と，大潮程度の潮位変化であったことが書かれている．これらの被害記述から，津波の様相について検討した．

②伊勢市大湊町（内閣府の想定最大波高 10m）において，安政東海地震津波の際，9～12m の津波高を示す『山中家記録』がある．同書は，当時の大湊年寄家の山中秀之によるものであり，その概要は，「築屋敷橋詰の燈明台は，二丈七尺（8.18m）あるが，その上を越したということは，浪の高さは三四丈（9～12m）もあっただろう」とされている．燈明台の所在地とその高さについて，大湊町振興会が所蔵する『大湊古文書』を確認したところ，大湊町東部の波除堤の裏（現在の「灯明台跡」）に位置し，石垣が八尺（約2.4m），その上の燈明台の高さが三間半（約 6.4m）と書かれ，全体で約8.8m であることがわかった．一方，大湊町内の標高と，津波被害を調査した結果，町内の標高は最大でも 3m 程度であるにもかかわらず，奉行所への届出では，町内の津波被害は「流家十四軒，半流家四軒」程度であり，町内の浸水高は最大 2.6m 程度であった．これらを踏まえると，この燈明台を越える三四丈もの津波が襲来したとは考え難い．

③熊野市新鹿町（内閣府の想定最大波高 17m）において，昭和東南海地震津波の際，21.84m の津波高を示す『新鹿の津波』がある．同書によると，「現新鹿小学校正面玄関 海抜 21.84m）」とされている．現地での聞き取りの結果，昭和東南海地震津波の後に小学校は移転したが，『新鹿の津波』に書かれた海抜は，現新鹿小学校の海抜を測量したものであった．聞き取りや旧地形図から，新鹿小学校の旧地は大仙寺付近（電子国土で標高 11.3m 程度）であったと考えられる．

④紀北町長島（内閣府の想定最大波高 19m）において，安政東海地震津波の際，45.5～48.5m の津波高を示す『續地震雑纂』所収の「長島浦幷浦々，地震聞書」がある．その概要は，「十一月四日四ツ時に大地震があり，俄かに津波が起こり，九百軒のうち四五百軒ばかり流失した．（中略）長島で，噺によると，津波は地震が止んでから続けて三度襲来し，第一波で大体の人家が流され，第二波は真に大きく，高さ凡そ十五六丈（45.5～48.5m）もあった．」とされている．ここで，同津波被害に関する他史料を確認した．養海院（電子国土で標高 4m 程度）において波先がかかる程度であったこと，仏光寺（電子国土で標高 2.3m 程度）において，宝永度の「津波流失塔」が現存，安政度の新たな津波供養塔が建てられていることから，大きな被害はなかったと考えられる．また，長島神社の神主による「嘉永五年津浪記録」（嘉永五年は筆写時の誤りか）において，津波の高さについて，「横町にある蛭子神社の松の梢が少し洗われるほど潮水が上がっていることから，二丈（6.1m）くらいであろう」と推定している．蛭子神社は，当時江の浦大橋北詰付近に位置し，電子国土で標高 2.2m 程度の位置にあった．以上のことから，津波の高さは，最大でも 6m 程度であったと考えられる．

§3. まとめ

三重県における南海トラフ沿いの歴史地震津波の津波高について，内閣府の想定最大波高を上回る高さを示す史料が確認されている．しかし，現地確認と他史料との比較検討の結果，内閣府の想定を上回る地点では，過大評価の可能性が高い．今後は他県についても現地確認と史料検討を実施し，南海トラフ沿いの地震津波像の実態を明らかにしていく．